

# 〈老い〉の不在がもたらす軋み

柿本 昭人

Akihito Kakimoto

剣は折れた！ 私たちの青春そっくりではないか  
——ボードレール

## 1. 空白の〈老い〉

「老人」と「老化」という表現が消えつつある。それぞれが、「高齢者」と「加齢」という中立的な表現に取って代われようとしている。「老人」と「老化」という否定的なニュアンスを含む用語は、「年齢差別Ageism」であって、よろしくないという次第である。とはいえ、超高齢化社会にあっては、運動に励み、そして／あるいは学習に精出す高齢者が「老い」に抗って「生き生き」と暮らすことが奨励＝強制されているのもまた間違いない。「高齢者」と「加齢」という用語によっても、「老い」は否定の位相にあり続けているのである。

自然物が時間の経過による破壊に従属している、という観察によって19世紀に掻き立てられた「摩滅と裂開 wear and tear」の仮説に、依然として我々は依拠しているのである。かつての神学者たちのように、魂の不易性から、人間は高齢になるほど賢明になると主張する者は、もはやいない。博物学者ビュフォンが「誰もが大きい自然にあって、変化し、そして死ぬ。完成に達すると、すぐに変質し始める」と述べた18世紀の後半から、我々はさほど遠からぬところに居つづけているのである<sup>1)</sup>。

そうした生物学上の人間の生の経過が社会的な人間の生に波及してくる理由はこうである。「誕生—成長—衰退(老化)—死」という生のリニアな過程のなかに位置づけられる……(中略)……生物学的な成長」が「子どもと大人」という「社会的な承認／未承認」という規範的な区別」に押し込まれてきた。しかし、その「成熟」を承認する「成人儀礼」が失われてしまう。この「成熟なき成長」の「前眺的な」時間意識が産業社会と親和的であり、「個人の生涯も社会の帰趨も、誕生—成長—衰退—死」という動物や植物の生のリニアな過程に重ねあわせてイメージされる<sup>2)</sup>。

社会的には常に「前へ」を要求されながら、生物学的には衰退から死への過程が待ち受けている。

〈老い〉は空白のままである。その空白のなかに、高齢人口がどんどん流れ込み、〈老い〉はその存在が「問題」としてしか問題にされない。それほど〈老い〉の空白はきわまっている<sup>3)</sup>。

現状は、この「空白」を埋め合わす身振りそのものが強制され、また産業化されているのではなからうか。

## 2. 「空白」への従属を遡及的に自立の証に変ずるループ

大学の期末テストの成績が発表されると、学生から次のような申し立てが来るようになった。その申し立てを見て、愕然とする。「私は講義に一度も欠席していません。熱意があるので、いつも最前列で聴講していました。講義に出る前に予習を〇〇時間、講義後も復習に△△時間してきました。にもかかわらず、成績評価が最高評価のAではないのが、納得いきません」。——「できてないところがあったからじゃないの」ということで、当該学生の答案を引っ張り出し、再チェックを行う。「問1は、〇〇と書くべきところ、△△とあり減点□□、問2は……。従って君の成績評価は●となって、Aではありません」と回答書を書くことになる。

こうした学生が企業に入ると「こんなに頑張ったのに、評価されない」ということで、早期離職者の増大を招いているとも言われてきた。それへの対応として、やれ「モチベーションの喚起」、やれ「コーチング」、果ては「人事考課システムの再構築」と喧しくなってきた。学校であれ、企業であれ、末端の「教育現場」の負担は、いよいよ増すばかりである。「そんなこと、自分で受けとめて、自分で解決してよ」という嘆息の声が消えることはなさそうだ。

件の学生が、事態をどう受けとめて、再度の申し立てをなぜしなかったのかは承知していない。もし、次のように受けとめたとしたら、次にどうするのだろうか、想像を逞しくしてみる。

——私には堅固な意志があり、だからこそ自己規律化して無遅刻・無欠席、予習も復習も怠らなかつた。だとすれば、問題は私の頭脳、意志と自己規律化に反して結果を出せない故障や欠陥を抱えているのではないか。ならば、それは医学ないし生物学上の問題であり、問題の解決は私の意志と自己規律化をもってしても不可能である。必要なのは、医学＝生物学的解決である。

——いや、待てよ。私が堅固な意志を保持し自己規律化をなしていたというのが錯覚で、意志はそれほど堅固でもなく、自己規律化も行われていなかったとしたら、真に堅固な意志を保持し自己規律化が達成できる医学＝生物学的解決が必要である。

実際、こうした願望を叶えるという医薬品や食品、書籍やソフトに事欠いてはいない。それ一つで、脳の作動環境が用意できるという思い。それ一つで、病気／健康、障害者／健常者という壁を飛び越えられるという幻想である。例えば『脳トレ』における「脳年齢判定」は、最高の脳の状態を20歳におき、それとの年齢差によって脳の状態を可視化しようとするものである。しかも、脳の特性によって、何歳であっても鍛錬の結果、脳年齢は20才になれるという、「やればやるほど良くなる」というゲームの掟がそこにはある<sup>4)</sup>。

「脳トレ」ゲームについて、小生は少し前にこう書いた。

「やればやるほど良くなる」というゲームの掟に、社会の掟に従い、その掟に屈服することになる。確実に再生産されているのは、その掟の方なのである<sup>5)</sup>。

では、「脳トレ」に熱心に励んでいる者は、本当にその効果を信じているのかといえば、「そこまでは思っていないけれど、やってて楽しいからいいんじゃない」というのが実情で

はなかろうか。科学誌でさえ、認知運動訓練のマイナス面はサービスの購入にお金がかかることぐらいだ、とうっちゃっている<sup>5)</sup>。

「売り上げ1千万本超の大ヒットゲームに、監修した教授の“恩師”も疑問視……任天堂DS「脳トレ」に異論続出!」(『週刊朝日』2007年11月16日[=2007/11/16。以下、日付をこのように略記])というスタンスは、問題の所在をはぐらかしてしまう。『発掘!あるある大事典Ⅱ』が消滅したのが、効能の「捏造」であったのと同じように。「脳トレ」の場合も、本当は認知症の治療や予防ができないことはよく知っているが、「脳トレ」を続ける私にはまだ意欲や自己規律化への意志があって、「ボケ」てないんだわ——こちらの方が、実は問題なのである。

その意欲や意志が脳内化学物質に依存し、遺伝子工学が、そのレベルを完全にコントロールするようになったとしても、「掟の再生産」は止まらない。従属を遡及的に自立の証に変ずるループが、そこにあるからだ。そして、そのループの上を動き続けていることが、生きていることの確証を与えてもいるのである。

F・フクヤマは、遺伝子工学の助けによる成果が、それに頼らない努力の成果に劣り、「道徳的に受け入れられない方法」だと言う。この上下関係の逆転を阻止するために遺伝子工学への国家規制を、自由で自立的な民主主義の擁護のために求める。しかし、彼が「承認されたいという欲望には生物学的根拠があり、その根拠は脳内セロトニンのレベルに関係する」と言うとき、彼は承認の問題を事実問題として扱いながら、国家による遺伝子工学の規制によって、それをなかったことにできると主張する<sup>7)</sup>。しかし、国家による遺伝子工学の規制が実行される前に、彼の欲望は脳内セロトニンに動かされながら、同時にそれを否認する、そうしたループに彼自身も嵌り込んでいるのではないのか。

### 3. 健脳丸——疲れを知らぬ健全なる頭脳へ

お手軽な「脳改造」の夢を語るのは、「脳トレ」が嚆矢なのではない。日清戦争の終わった翌年、「健脳丸」と命名された売薬が登場する。この売薬は、この後ほぼ半世紀にわたって「同じ」新聞広告を出し続ける。特に有名なのは、広告に用いられた坊主頭に健脳丸と書き込まれた図案である<sup>8)</sup>。

広告の本文を、次の文言が縁取っている。右端には、「健脳丸は脳髓の母」。上下にそれぞれ「脳髓は精神の首府。万機の政之より出づ」「脳髓健康ならざれば快樂を得ず」とある。左端には「健脳丸は富貴の基」。上下にそれぞれ「精神的の事業は能力を費すこと多し」「事業の競争は精神の鋭鈍に起因す」。新発売の動機は、先の文言に囲まれて、こう始まっている。事業における「知識の競争」が激しくなり、仕事も腕力よりも知力が要求される「精神的競争」の時代となった。そのため「脳神経病者」と「夭折」する者の数が増大している。ところが「脳髓は精神の首府」であり、「万機の政皆之より出づ」るのだから、このように「貴重なる脳にして健康ならざれば」「日進月歩優勝劣敗の世に立て各事業に従事するを得ざる」結果に陥る。

他の売薬のように発売に当たって「徒に機能を自賛せず」というのは、「世上幾多の脳病患者本剤を服用」すれば「脳病を全治すると共に身体強壯」となるからである。そ

れが「健脳丸特有の効力」であると(『大阪朝日新聞』〔=以下『阪朝』])。翌年には、治療だけでなく「未発に防ぐ」と予防効果が書き加えられる(『阪朝』1897/1/5)。

「医学の進歩に伴ひて製剤法に一大改良を施した」(『讀賣新聞』〔=以下『讀賣』〕1903/12/16)健脳丸は、「脳病新薬」として「今や社会公衆より脳病薬の霸王たる讚賞を受る」と記す。加えて「記憶力を増進する特効」も謳い始める(『阪朝』1906/7/4)。

「日進月歩の医薬界の急潮に棹さし、売薬革命の急先鋒たる主義の旗幟を翻し」てきた健脳丸が、さらに「科学のお墨付き」を強調する。「現代刀圭界の明星にして、脳、神経病の研鑽最も深き医学博士島村俊一先生指導の下に、配剤の理想的刷新を行ひたるものは、我が健脳丸のみ也」(『阪朝』1908/3/9)。坊主頭に健脳丸と書き込まれたトレード・マークに、これ以降「島村博士証明」の文字が必ず加わるようになる<sup>9)</sup>。

1910年代末になると、「脳の使い方」「脳の抵抗力」という用語が広告に登場する。「適度に使へば使ふ程能率を漸次に増加し能力を増す」。ところが無理を重ね、放置し続けると脳神経の「抵抗力」が衰え、脳神経病となる。「抵抗力を増す為は何よりも先づ脳神経の栄養を増進し疲労を補ひ、前述べた諸徴候を撃退する適薬の服用が肝要である」。それが健脳丸というわけだ(『讀賣』1919/9/3)。

記憶力の増強だけではない。脳機能として「忘却性の恵み」も挙げられた。「不時の災難、事業の失敗、家業の煩累、学業の不成績、失恋懊悩等」があっても、脳には「通常の忘却性」があって「何時迄も其儘には感じて居らぬ」。しかし、「脳のどこかに欠陥」があると、この忘却の恵みに浴せず「煩悶の人」となる。その「脳の故障を快く」し、「神経を鎮静」し、忘却の力を回復するのが健脳丸となる(『讀賣』1920/8/24)。

前年に雑誌『改造』が創刊されたのを受け、健脳丸の広告も服用による「頭脳の改造」を明言する。「痼疾の脳神経病を治癒し、明晰健全なる頭脳を作る健脳丸、服用あれ」(『讀賣』1920/5/9)。なぜ、頭脳の改造が必要かと言えば、ここでも「健脳は成功を生む。成功する人、脳のよい人」だからである(『讀賣』1925/5/10)。

1930年代に入っても、「脳、神経病」は新発売当時と変わらず「時代病」である(『東京朝日新聞』〔=以下『東朝』〕1930/5/11)。健脳丸には、筋肉増強剤並に「唯一の強脳薬」という表現も用いられた(『東朝』1930/10/19)。それもまた脳の働きが「勝者敗者」を決するからであった。健脳丸によるドーピングの成果は、かくの如し(『東朝』1930/9/21)。

学生「健脳丸で近来非常な成績だ。此度の試験は首席だ  
実業家「トントン拍子に成功するのも、全く健脳丸の御庇護だ  
サラリマン「誠首どころか、破格的の昇級も健脳丸の為よ  
芸術家「究極する処、我々の芸術は健脳丸にて、初めて甦生せりか  
事務家「コンナに能率が上がるとは意外だ、驚くべき健脳丸の薬力  
軍人「頑健なる此体躯に、健全なる頭脳! 天下無敵

健脳丸は「現代人の頭脳の糧」。「明確な記憶力と俊敏な判断力こそは現代に生きる唯一の武器だ。君の脳から疲労と困憊とを一掃」しなければならない(『東朝』1934/3/5)。

新発売当時のコピーは生き続ける。「脳は資本」であり「明哲な頭脳は支配者」の地位を約束する(『東朝』1934/4/7)。健脳丸を服用しないと、「記憶力、思考力の衰へた頭脳は腐った海綿」となる(『讀賣』1934/11/21)。「頼むは頭脳だ。智能の戦ひだ。疲れを知らぬ健全なる頭脳。利刃の如き明快なる判断力。勝利は!その人のものだ」(『東朝』1935/10/15)。脅迫紛いのコピーも出てくる。「健脳丸を常用なさい、他人のことではない、貴方自身の問題です」(『東朝』1936/4/9)。

発売開始を告げる広告から40年を経過しても、「脳は活動の原動力だ!」というコピーが繰り返される(『東朝』1937/3/20)。まだまだ続く。「人生の勝利は頭の問題」(『東朝』1938/10/11)。「能力戦に負けるな!!」(『東朝』1939/8/18)。「頭の働く人が勝ち。能力だ、実力だと喧しい今日、健脳丸を常用して頭脳の明快を保たれよ」(『東朝』1939/3/14)。

これ以降は、さすがの健脳丸の広告も戦時体制下の制約を受ける。「脳は資本」であり「明哲な頭脳は支配者」の地位を約束する、という発売以来ずっと継続されてきたコピーが消える。大政翼賛会発会の翌日の朝刊には、こうある。「健脳丸の服用こそ、ホントの脳の新体制」(『讀賣』1940/10/13)<sup>10)</sup>。神宮外苑競技場で挙行された学徒出陣壮行会から数日後の広告では、「頭脳を明快ならしめ、明日の生産増強に備ふ」と(『讀賣』1943/10/26)。敗色濃厚となった1944年の広告では、「頭痛に健脳丸」にまでコピーも縮まってしまう<sup>11)</sup>『東朝』1944/4/10)。

#### 4. 部分—個人の闘い

ここで、「抑圧の仮説」に基づく「抑圧からの解放」を唱えてきた旧来の権力論と決別するために、フーコーが1970年代の半ばに〈生—権力bio-pouvoir〉を提起したことを思い起こしておこう。

死なせるか生きるままにしておくという古い権力に代わって、生きさせるか死の中へ廃棄するという権力が現われた、と言ってもよい。死に伴う儀式が近年廃ってきたということに示される死の価値下落も、恐らくこのようにして説明されるだろう……(中略)……死は[この新しいタイプの]権力の限界であり、[この]権力の手には捉えられぬ時点である。死は人間存在の最も秘密な点、最も「私的な」点である<sup>12)</sup>。

死に対する途方もない権力は……(中略)……生命に対して積極的に働きかける権力、生命を経営・管理し、増大させ、増殖させ、生命に対して厳密な管理統制と全体的な調整とを及ぼそうと企てる権力の補完物となるのである<sup>13)</sup>。

このフーコーによる「生—権力」の規定は、その鮮やかさをもって受け入れられてきた。この生—権力は資本主義の発達に不可欠の要因であり<sup>14)</sup>、「生きている者を価値と有用性の領域に配分すること」を旨とする。死は従来の地位を変更され、生の「単なる裏面」「補完物」となる<sup>15)</sup>。したがって、誕生から遙かに遠ざかった老人は死の側に排除され、価値と有用性を欠く者として扱われてしまう、という理解も出てこよう。

しかし、生一権力のもとでの死については、こうも記されている。「死は〔この新しいタイプの〕権力の限界であり、〔この〕権力の手には捉えられぬ時点である。死は人間存在の最も内密な点、最も《私的な》点である」<sup>16)</sup>。

それでは、生一権力は、生きていることの実証をどこに置いていたのか。その権力が捉えられぬまま、個人に内密なものそのままにされている死の地位とは何か。生一権力の規定による近代の見取り図の鮮やかさゆえにフーコーの規定を受容する者も、生一権力のもとでの死の地位を看過してきたのではなかったか。

フーコーと「比類なく、似ていて似ていない双子」とも呼びうるドゥルーズが<sup>17)</sup>、フーコーを規律社会とそのテクノロジーの一つである「監禁」の思想家と見なす潮流を、アナクロニズムとして批判したことは、生一権力のもとでの死の地位をもう一度考え直す契機を与える可能性を有していた。「開放環境における不断の管理」を行う管理社会に我々はいるのだ、と述べた先駆者の一人に、ドゥルーズはフーコーを数える<sup>18)</sup>。

開放病棟とか、在宅介護チームなどは、もうかなり以前から実現しています。これから先は、教育が閉鎖環境の色合いを薄め、もう一つの閉鎖環境である職場の世界との区別も弱まっていくでしょう。やがては教育環境も職業環境も消滅して、あのおぞましい生涯教育が推進され、高校で学ぶ労働者や、大学で教鞭を執る会社幹部に対して、絶え間ない管理の制度が整えられていくに違いありません<sup>19)</sup>。

ドゥルーズは、規律社会から管理社会への移行を、個人と集団の同時形成から個人内での分割への移行として特徴づけていた<sup>20)</sup>。

規律社会から管理社会への移行において、個人内における正常部分／異常部分あるいは適合部分／不適合部分の析出とそれに基づく選別と階級づけが生じたのかどうか、一度は検討してみる価値はあろう。

ならば、「人間存在の最も内密な点、最も《私的な》点」つまり「個人の死」の登場を徴しづけた『臨床医学の誕生』を読み返す必要がある。そこでは、死を生を停止とする伝統的な思考に立つビューイソンが、「生とは、生の不在に抵抗する諸々の働きの総体である」という生の定義を「悪循環」として退けるエピソードが紹介されている。しかし、ビシャの出発点はそこにあった<sup>21)</sup>。生から病へ、病から死へという道筋は完全に途絶え、死を基盤として生と病はその地位を再編成される。生は死に抗う動きの総体となり、病は生からの逸脱ではあるが、生に属し、「死へと赴く生命」となる<sup>22)</sup>。

ビシャは、「分割不可能で、決定的で、恢復不可能な事件のように見えていた絶対的な地位」にあった死を相対化する。「取るに足らない死、部分的な死、進行的な死、死そのものの彼方で漸く終結する緩慢な死」のように、死を生の中で再配分するのである<sup>23)</sup>。だからこそ「諸器官の働きは、それに固有の生を保ち続ける」<sup>24)</sup>。生は死の中で再発見されるのである<sup>25)</sup>。これがビシャの屍体解剖による、新しい医学の「まなざし」の誕生だった。

ビシャの思考の系譜にあっては、先に述べたドゥルーズが規律社会から管理社会への移行による新たな事態としていた、個人の分割可能性が浮上する<sup>26)</sup>。なぜなら、そ

の個人の基盤にある死もまた一つの絶対的な死ではなく、多種多様な相対的な死があるからである。それぞれの死への抵抗による多種多様な生があり、それぞれの生からの逸脱としての多種多様な病があり、そしてそれぞれへの治療が登場することになるからである。

生の不在への抵抗。それが意欲や意志に駆動の出発点を置こうが、その意欲や意志が脳内化学物質の働きに還元されようが、その脳内化学物質の反応の駆動の出発点は、「何か」のままに留まる。生きていることを承認してもらうためには、生の不在に抵抗する諸々の働きがあることを示し続けなければならない。生の中に再配置された諸々の死のそれぞれで、その抵抗を続けなければならない。

「変性 *dégénération*」は、病理解剖学が出現する以前から、「ある原点からの失墜運動」として使用されていた。それは、「自然のままの丈夫な人類が、社会生活、文明、法律、言語によって次第に人工と病の生活へと追いやられ、弱くなっていくこと」を意味していた<sup>27)</sup>。病理解剖学において「変質」が重要性を帯びていくのは、そうしたネガティブなものから、ポジティブなものへと動いていったからである。「変性」は「単なる転落」でも、「自由な逸脱」でもなく、諸法則に従っていることが見いだされていく。重要なのは、「諸器官の活動そのものによって、その器官の部分に変化や損傷が起こりうる」点にある<sup>28)</sup>。

生の不在への抗いの間断なき反復は「変性」を来す。そこで「脳トレ」にも「クールダウン」が加わる<sup>29)</sup>。健脳丸の場合も、間断なき抗いの反復が、脳の栄養不足、血液循環の不調による脳充血、脳の疲労蓄積、老廃毒素の蓄積による脳の自家中毒を引き起こす(『讀賣』1935/10/23)。健脳丸の服用は、「変質」を一度停止し、「生の不在」への抗いを再起動するためのリフレッシュを提供するのである。

西周は、生まれもってであれ、その後であれ、抗わない人間について、「人世三宝説」(1875年)でこう述べている。「痼疾以て健康を害し、頑鈍以て知識を害し、懶惰以て富有を害する時は乃ち人間に齒せられず、社交より擯けらる。之を称して癡人と呼び、乞丐と呼ぶ」<sup>30)</sup>。福沢諭吉も『学問のすゝめ』「人望論」(1876年)で、「人智發育の理」を間断なき抗いに置く。「凡そ人心の働き、これを進めて進まざるものあることなし。その趣は人身の手足を役してその筋を強くするに異ならず」<sup>31)</sup>。

健脳丸の発売される前年、内村鑑三は「時勢の観察」で、当時の日本社会に「青年」と「老人」しかないと言う。その青年も、「彼等の青年時期は永くは続かず」「老衰するは甚だ速やか」である。なぜなら、「三十歳にして早や已に勉学を放棄す」るからである。「青年らしからぬ青年」である。「嗚呼、欲しき者は老青年と青年らしき青年ならずや」と嘆かれる。「老青年の好標本」とは「齡九十歳になんなんとするグラッドストーン氏が尚ほ毎朝二時間づゝの希臘古典学の考究を怠らざるが如き」者なのである<sup>32)</sup>。

忘れられているのは、次のことである。ビシャの「まなざし」からすれば、死は生の消尽点ではない。フーコーは、こう書いていた。「半ば密かに進行しながら、しかし既に明白となっている死の緩やかな近づきにあつて、輝きのない平凡な生が、ついに独自のものに転じる」<sup>33)</sup>。「老いの仕方」や「死に支度」まで、その学習と習得を要求し、産業化するこの世界にあつて喜ぶのは、「生きている」側ばかりなのである。

止まらない「掟の再生産」を止めるのは、あるがままの老いと死の擁護かもしれない。それとでも、ロマン主義や現象学として産業化されるという蹉跎の過去と、「臨床」を冠した学問分野の登場と「一人一人を大切に」のお題目の下、一人一人の老いと死を鋳型にはまった対応で遇する蹉跎の現在があるが。

空白の〈老い〉は黙したままでいるどころか、軋みの音を立て続けている。「成熟なき成長」の前方への運動に巻き取られていく我々の社会には、その軋みの音は届きにくい。フーコーはその軋みの音を聞きたくないと言えよう。「白状しますが、高齢者たちの実際の地位、我々の社会における彼らの孤立と悲惨について語られることに、私はかなり留保つきですし、随分と後ろ向きなのです」<sup>34)</sup>。第二次世界大戦まで家庭の中であらゆる屈辱と憎悪を味わわれ、疎外されていた高齢者が、今では退職金を受け取り、社会保障によって、それなりの余裕を持って暮らしている。高齢者が施設で屈辱と憎悪を味わわされていることに世間から注意が払われるのは、その数が少ないからだ、とさえフーコーは述べている<sup>35)</sup>。

そうフーコーが述べていた同じ頃、フーコーは〈老い〉の軋みに直面していた。*Dits et écrits*には収められなかった「生の様式としての友情」でのことである。これは、フーコーが創刊に関わり、彼自身が読者でもあった男性同性愛者向けの雑誌でのインタビューである。記事は「あなたは五十代でいらっしゃるんですね」というインタビュアーの問いかけから始まる。「読んでいて自分の年齢を問わなくてもよい」はずだった雑誌が、問わざるを得ない記事に埋め尽くされ、自分の居場所がなくなったとフーコーは嘆く。「同性愛と若者同士の恋愛」を同一視する傾向に、「著しく年齢の異なる二人の男」の関係を引き合いに出して、警告を発する<sup>36)</sup>。

彼らは、武器も、型通りの言葉も、お互いを相手の方へと導く動きの意味について彼らを安心させるなものもなしに向き合います。彼らは、いまだに形を持たぬ関係を、AからZまで発明しなければなりません。

「いまだに形を持たぬ関係を、AからZまで発明しなければ」ならないのは、本当に「著しく年齢の異なる二人の男」たちに限定されるのだろうか。

フーコーは〈老い〉を素通りして、そうした社会保障をはじめとする、制度によって機能する関係が我々に問いかけるものの方に歩みを進めてしまう。「人生は何に値するのか、人は如何にして死に立ち向かうべきか」という問題が提起されるのだと。フーコーはそうした問いへの応答もまた、内実を欠いた慣行という制度への懐古から発しているのなら、いっせ「死＝消失に意味と美を与えようではありませんか」とインタビュアーを揶揄する<sup>37)</sup>。

## 5. 老い＝記憶／歴史＝記載

フーコーに較べれば、老いることの軋み、哀惜の鈍い痛みを取り上げるシャルル・ペギーに〈老い〉を思考する可能性を見るべきなのかもしれない。それはちょうど、諸々の生が、その生の不在に抗う運動にある限りで生であることの裏面に張り付く運動である。

ペギーは、「老いの原理」について、こう述べる。

老い le vieillissementとは、その本質において、回帰の運動、哀惜の運動である。自分自身の内への、自分自身に対しての、自分の年齢に対しての回帰の運動である。あるいはむしろ、自分の年齢、現在の年齢になったことを通じて、それ以前の年齢に対する回帰の運動である<sup>38)</sup>。

また、「老いとは、その本質において記憶の働き une opération de mémoire」であり、この記憶の対極に歴史と記載 inscriptionがある。したがって「老いとは、その本質において、歴史が欠落する働きである。そして記載とは、その本質において、記憶が欠落する働き」となる<sup>39)</sup>。

先ほど、老い＝記憶と歴史＝記載は対極にあると述べたが、それではいささか不正確なきらいがある。ペギーの空間では、老いと歴史は直交する。「歴史は本質的に出来事に沿って動く」が、「記憶は本質的に出来事の内部に位置し、何よりも先ず出来事の外に出ないで、出来事の内部に留まり、内部から出来事を遡る」。「歴史は出来事に平行して滑走する」が、「記憶は出来事に対して中心にあって、出来事の軸をなす」のである<sup>40)</sup>。

ここで紹介した老い＝記憶と歴史＝記載を対比するペギーの議論は、極めて示唆に富む。小澤勲が「もの盗られ妄想者」に対する治療で指摘していることに相通じている。

急がず時間をかけて、円環状に繰り返し繰り返し語られる彼らの言葉を心を込めて聞くという作業は、それだけで精神療法的意味がある。あまり誘導したり、時間的順序を正したりはせずに、聞く。多くは、自らの意志ではなく私たちの前に連れてこられた彼らは、このような作業を通じてようやく物語る主体となる。……(中略)……このような過程を通じて、彼らは矜持をもって生きてきた過去を生き直すのである<sup>41)</sup>。

だが、ペギーの議論は、〈老い〉の軋みを和らげるところか、掻き立てるような叙述にうって変わる。

老人 le vieillardは老いるということ vieillirが何であるかを知らない、と彼女はいった。彼らは最早それを知らない。幸いなことに、彼らは老い vieillissementについて何も認識しないし、最早何も理解しない。だが、まさに青春から抜け出してしまったことを感じ取り、己の内ですわられた青春を見つめている40歳の男、その男は老いということと老いとが如何なるものであるかを知っている<sup>42)</sup>。

「老人」は歴史＝記載の側にあり、「40歳の男」は老い＝記憶の側にあるとされているのが分かる。「幸いにも」とペギーが言うのは、「神が人間を歴史家として造ったということは、神が人間に対して与えた最大の慈悲であり、最大の憐れみ」だからである。青春

が無に帰し、それを知る男は、もはや喪失の痛みも感じなくなる。「自分の思い出を souvenirs 思い起こす老人ほど、陽気な者はない。一方、40歳の男は自分の思い出を思い起こすのではない。自分の記憶 mémoire に加護を祈るのである」<sup>43)</sup>。

ペギーは〈老い〉を思考する可能性を奪う、とここで性急に断を下すことはできまい。40歳を前後して老人の境界線が引きうるように見える点はひとまず無視しておこう。ペギーの議論を敷衍すれば、むしろ神の慈悲によって「幸いにも」人間が「歴史家」に生まれつく可能性は既に遠くに消えたはずが、我々の現状は不幸にも「歴史家」になるべく産業化や制度によって強いられているのだ、と言えよう。健脳丸や「脳トレ」は、〈老い〉のもたらす軋みや鈍い痛みを「記憶」させず、我々を老いることから遠ざけながら、我々を「歴史家」へと仕立て上げているのである。

ペギーの言う「記憶」や小澤勲の言う治療のあり方は、極めて個別的である。その道筋は偶然に満ちている。「いまだに形を持たぬ関係を、AからZまで発明しなければ」ならないとしても、それが、ただ一つの「正しさ」を有する方式や手順に帰着しては、「歴史家」の増殖しかもたらさない。〈老い〉のもたらす軋みや鈍い痛みが嵌りこもうとしているのは、他ならないこの「歴史家」の産出であろう。ビジャの病理解剖に発するまなざしは、個人の基盤にあると考えられている一つの絶対的な死に対して、多種多様な相対的な死があり、それぞれの死への抵抗もまた多種多様であらざるをえず、我々の個人の身体に起きている〈老い〉もまた、多種多様であるからには、〈老い〉の不在を生きる生き方、老い＝記憶を生きる生き方も、一つ一つ発明されなければならないのである。

## 註

\* 本稿は『TASC MONTHLY』(第384号、2007年12月号、財団法人たばこ総合研究センター発行)に掲載予定の「『脳トレ』はなぜ流行る——「生の不在」に抗って」を大幅に加筆修正したものである。

\* 外国語文献のうち、翻訳のあるものは可能な限り使わせていただいたが、訳文を変更したものがある。その責任は、すべて筆者にある。

1) German E. Berrios, *The History of Mental Symptoms: Descriptive Psychology Since the Nineteenth Century*, Cambridge, 1996, p. 191.

2) 鷺田清一『老いの空白』弘文堂、2003年、60、63、67頁。

3) 同上、I頁。

4) 川島隆太『現代人のための脳鍛錬』文春新書、2007年、13、25頁。

5) 柿本昭人「『脳トレ』ブーム——支配は服従を享樂し、服従は支配を育む」『SITE ZERO/ ZERO SITE』第1号、2007年9月、94頁。

6) 同上、93頁。

- 7) Francis Fukuyama, *Our Posthuman Future: Consequences of the Biotechnology Revolution*, London, 2002, p. 45-46. [『人間の終わり——バイオテクノロジーはなぜ危険か』(鈴木淑美訳)ダイヤモンド社、2002年、54-55頁]
- 8) 「此凶案でもって広告界に雄飛した」。中根榮『日本新聞広告史』日本電報通信社、1940年、489頁。
- 9) 健脳丸はこの時期「一頁広告を何回となく頻載し、広告界を独占するかの如き観があった」(同上、578頁)。件の「現代刀圭界の明星にして、脳、神経病の研鑽最も深き医学博士島村俊一先生」の経歴が、『日本現今人名辞典』(1900年)には、こう記されている。「島邨俊一 君は京都の医師なり文久元年十二月生る明治廿年帝国大学医科大学を卒業し医学士の称号を受け医科大学助手となり精神病学教室に勤務す廿四年独逸及び澳国に留学し精神病学及び神経病学を専攻し廿七年帰朝後直に京都医学材教諭となり精神病学及び神経病学の講義を担任す廿九年医術開業試験委員を仰付けられ卅一年更に京都府医学校教諭に任し卅二年京都府立療病院副院長となる今共に其職にあり是より先き君の京都医学校に入るや精神病及び神経病の外来診察を開始し後府会の協賛を得て療病院内に精神病室を新設せしめ君其主任として外来診療に従ふ地方病院精神病室の嚆矢なり」(田中重策編『日本現今人名辞典』日本現今人名辞典発行所〔『明治人名辞典Ⅱ』下巻、日本図書センター、1988年〕、しノ十五)。この島村が文部省への論文提出によって「医学博士」の学位を授与されるのは1906年である(『讀賣』1906/8/5)。
- 10) 中根榮は前掲書第8章「新聞広告の浄化」で、こう述べている。政府は政治関係の新聞記事には敏感に反応し、厳しい取り締まりを行ったが、「広告風壊関係に対しては、全く無関心であり、そのため見るに堪えず、読むに忍びざる如き記事なり広告なりが、屢々紙面に現はれた」。その後取り締まりが強化され、「浄化」も実をあげるようになったが、「性関係の売薬広告等」では「昭和年代に熾んに跋扈」し続け、1932年、警視庁が「売薬広告違反例」を掲げて、取り締まりに乗り出した(1129頁)。「健脳丸」がそれまでに使っていた広告中の文言に類似する「違反例」を挙げておこう。まず、売薬法第8条にある「売薬の効能」についての「誇張的広告」である。「根本的治療剤云々」「何程の重患も必ず全治す云々」「如何程永年重症も必ず再発を除き全治奇妙也云々」「軽症は幾日重症は幾日の服用にして必ず全治す云々」「世界無比の最新薬云々」(1129-1130頁)。次に売薬法第9条である。これは、売薬の容器または売薬に添付されない文書に記載することを禁じている。「医師其の他の者が効能を保証したるものと世人をして誤解せしむるの虞ある記事」である(1132、1134頁)。しかし、「健脳丸の服用こそ、ホントの脳の新体制」(『讀賣』1940/10/13)の新聞広告には、それでも「島村博士証明」の文字が坊主頭に「健脳丸」と書き込まれたトレード・マークに入ったままである。取り締まりが強化された以降の1935年の新聞広告の本文にも、「島村博士」は登場する。「島村博士は斯ふいふ人々に健脳丸が有効だと推奨されたが、健脳丸には一剤で血行を整へる作用、

消化を助け、脳の栄養を補ふ作用、神経の昂進を鎮めて真の安眠に導く作用、便通を快くして疲労素を排除する作用等を具有するので一時押への頭痛薬や単純な下剤と異り、脳のため極めて合理的な事が認められ、これによって不眠便秘の解消、神経衰弱の恢復が得られ、進んで頭脳を明快健全に記憶力を増進する事は明かです」(『讀賣』1935/3/23)。

- 11) 第二次世界大戦後も健脳丸は「脳病良薬」のままだった(『讀賣』1946/10/20)。「脳の機能を高めよ!」(『讀賣』1954/3/12)。だが、コピーの重心は「便秘」に移る(『讀賣』1962/3/6)。「便秘からくる頭やからだの変調に」(『讀賣』1964/12/25)。健脳丸は「健のう丸」と名を換え、便秘薬として現在も販売されている。「健脳丸」から「健のう丸」への名称変更のいきさつについては、「[ブランド物語]辻本一義・辻本特許事務所 丹平製薬 便秘専門で再出発」(『毎日新聞』大阪夕刊、1994/3/23)を見よ。
- 12) Michel Foucault, *Histoire de la sexualité I: La volonté de savoir*, Paris, 1976, p. 181-182. [『性の歴史 I —— 知への意志』(渡辺守章訳)新潮社、1986年、175頁]
- 13) *Ibid.*, p. 179-180. [同上、173頁]
- 14) *Ibid.*, p. 185. [同上、178頁]
- 15) *Ibid.*, p. 179, 189. [同上、173、182頁]
- 16) *Ibid.*, p. 182. [同上、175頁]
- 17) 丹生谷貴志『ドゥルーズ・映画・フーコー』青土社、2007年、302頁。
- 18) Gilles Deleuze, *Pourparlers 1972-1990*, Paris, 1990, p. 236. [『記号と事件 1972—1990年の対話』(宮林寛訳、河出書房新社、1992年、288頁)]
- 19) *Ibid.*, p. 236-237. [同上、288-289頁]
- 20) *Ibid.*, p. 244. [同上、296頁]
- 21) Michel Foucault, *Naissance de la clinique*, Paris, 1988[1963] p. 147. [『臨床医学の誕生——医学的まなごしの考古学』(神谷美恵子訳)みすず書房、1969年、200頁]
- 22) *Ibid.*, p. 158. [同上、214頁]
- 23) *Ibid.*, p. 147. [同上、199頁]
- 24) *Ibid.*, p. 144. [同上、196頁]
- 25) *Ibid.*, p. 170. [同上、227頁]
- 26) Deleuze, *op. cit.*, p. 244. [邦訳、296頁]。それ以上分割できない個人in=dividuのさらなる分割可能性について、「ミシェル・フーコーのゲーム」(1977年)で、フーコーはこう述べている。「我々は、すべてがすべてに対して闘っている。そして、我々の

内側で、常に何かが我々の内側の別の何かに対して闘っているのです」。そして、一つのキャッチフレーズを提起する。「部分一個人 *sous-individus*」Michel Foucault, *Dits et écrits 1954-1988, II 1976-1988*, Paris, 2001, p.311. [『ミシェル・フーコー思考集成Ⅵ』(蓮實重彦／渡辺守章監修)筑摩書房、2000年、426頁]。

- 27) Foucault (1963), *op. cit.*, p. 158. [邦訳、214頁]
- 28) *Ibid.*, p. 161. [同上、217頁]
- 29) 柿本、前掲論文、87頁。
- 30) 大久保利謙編『西周全集』宗高書房、1962年、527頁。
- 31) 福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波文庫、1942年、158頁。
- 32) 『内村鑑三全集3』岩波書店、1982年、249頁。
- 33) Foucault (1963), *op. cit.*, p. 176. [邦訳、234頁]
- 34) Foucault (2001), *op. cit.*, p. 1200. [『ミシェル・フーコー思考集成Ⅹ』(蓮實重彦／渡辺守章監修)筑摩書房、2002年、225頁]
- 35) *Ibid.*, p. 1200-1201. [同上、225-226頁]
- 36) ミシェル・フーコー「生の様式としての友情」『同性愛と生存の美学』(増田一夫訳)哲学書房、1987年、11頁。[De l'Amitié comme mode vie, in: *Gai Pied Hebdo*, no. 126, 30 juin 1984.]同様の発言がFoucault (2001), *op. cit.*, p. 1152. [『ミシェル・フーコー思考集成Ⅸ』(蓮實重彦／渡辺守章監修)筑摩書房、2001年、154頁]にある。「ゲイの刊行物は、私が望むほどにはゲイ同士の友愛 *amitié*、そして既成のコードや行動指針のない関係が持つ意味にページを割いてはくれません」。
- 37) Foucault(2001), *op. cit.*, p. 1201-1202. [邦訳(2001年)、226-227頁]
- 38) Charles Péguy, *Clio*, Paris, 1948<sup>35</sup> [1932] p. 228. [『歴史との対話——クリオ』(山崎庸一郎訳)中央出版社、1977年、356頁]
- 39) *Ibid.*, p. 228. [同上、357頁]
- 40) *Ibid.*, p. 231. [同上、360頁]
- 41) 小澤勲『痴呆老人から見た世界——老年期痴呆の精神病理』岩崎学術出版社、1998年、217頁。
- 42) Péguy, *op. cit.*, p. 248. [邦訳、371頁]
- 43) *Ibid.*, p. 250. [同上、373-374頁]